

## おもちゃ美術館で紡ぐ地域の物語 ー地方創生の新しいビジネスモデルー

認定 NPO 法人芸術と遊び創造協会理事長 東京おもちゃ美術館 館長 多田千尋氏

### 森林大国ニッポンには「活樹」がない

日本は、世界第 3 位の森林大国です。ですから私は、それにふさわしいおもちゃ大国を目指したいと思っています。皆さんが我が子のために、我が孫のために、メイドインジャパンの木のおもちゃを買おうと思ったら、探すのにとっても苦労します。百貨店には売っていませんし、 Toysrus にもありません。日本は森林大国第 3 位にもかかわらず、木のおもちゃがほぼ無いのです。これでは子供が育つ環境が森林大国にふさわしいとは言えないのではないのでしょうか。

森林大国とは名ばかりで、自国の木を活かしていないのが日本の現実です。

戦後間もないころは、山林をほとんど切りつくしてしまっただけ山が多く見受けられました。そこで戦後の重要な政策として植樹を行っていきました。次に行われたのが育樹です。国家プロジェクトとして、皇族の方々による植樹祭や育樹祭が全国的に行われてきました。その結果、これ以上必要ないのではないかとと思われるほど植樹は進んでいます。裏を返せば、植えるばかりで切らないのです。そのため、花粉症になる人々は年々増加しています。

育樹の次には活樹をしなければなりません。ところが、活樹はほとんどなされていないのが現状であり、これは大変な問題だと思います。

植樹、育樹、活樹を一つのサイクルにしていくことが重要です。植える⇒育てる⇒切って使う⇒使ったらまた植えるということを廻していけないと、日本の山は循環していかないのです。

東京おもちゃ美術館は、「活樹」にスポットを当てて様々な活動をしていきます。

### メイドインジャパンで勝負する



左(上)の写真をみてください。このようなスタイルの子育て支援センターや赤ちゃんサロンは日本全国でとても多く見られます。

左(下)の写真に見られるような施設はショッピングセンターなどで子供の遊び場としてよく見かけます。

私は長年、もっと日本の文化で勝負できないか、日本らしい力で子供たちを育てられないかという想いを抱いてきました。

たとえば、素材や色です。日本の色彩文化は奥深く、山吹色に紫紺、朱色、紅色と多彩な色があります。しかし、子供たちの周りは、ヨーロッパカラーで埋め

尽くされています。

また、木でつくられたものに接することもほとんどないでしょう。

つまり、日本らしさとは無縁なのです。

多くの子供たちがどのような環境によって育まれているかと言うと、代表的なものが東京ディズニーリゾート、ユニバーサルスタジオジャパン、レゴランド、キッザニアなどです。これらの拠点はそれぞれアメリカ(ディズニー)、アメリカ(ユニバーサル)、デンマーク(レゴ)、メキシコ(キッザニア)となっていて、日本の子供たちは外国文化によって育まれていると言っても過言ではないのです。

私は、この現状を打破したいのです。欧米文化を否定しているのではなく、もう少し日本文化を取り入れながら子供たちの成長を育んでいきたい、そう思っています。今は、1 対 9 くらいの割合で外国文化に押されていますが、やがては 3 対 7 くらいで日本文化を取り入れていけたらと考えています。

マクドナルドやハリウッドもけっこうですが、子供たちの育みには日本ならではの文化が必要不可欠なのです。日本文化が外国文化に圧倒されているというこの状況に何とか風穴を開けるべく、このようなおもちゃ美術館を全国各地につくっています。

## ウッドスタート&ウッドエンド

〈日本〉で勝負したいという気持ちは高ぶっているのですが、何をもって日本で勝負するかという答えがなかなか見つかりませんでした。そしてとうとうたどり着いたのが、「〈日本〉で勝負するということは木を使うことではないか？」ということです。そう、木文化です。そして「木育」へとつながっていったのです。

その第一弾として行ったのが「ウッドスタート宣言」です。これは、暮らしの中に木を取り入れようという運動で、これを日本全国に広げるべく、自治体の村長、町長、市長の一人ひとりに直談判して「ウッドスタート」を公式宣言してもらうために市町村めぐりをしました。予想以上に親身に耳を傾けていただくことができました。現在日本にある 1,700 余りの市町村がそれぞれ、山林や廃校、赤字ローカル線、シャッター街など様々な問題を抱えています。とりわけ山林の問題は市町村の負担となっており、この機会に続々と公式にウッドスタート宣言をする自治体が現れました。

公式宣言をしてくれた市町村に約束してもらったことがあります。一つ目は誕生祝品として、住民に地産地消の木のおもちゃをプレゼントするということです。2 つ目は市町村内の小学校の机を地産地消の木でつくるように努力するということです。そのほか、園舎、校舎、庁舎など税金で建てる建物を木造に、木造が無理であれば、内装を木質化でということをお願いしました。そして最後に、棺桶です。これも地元の木を使ってはどうかと提案したところ、努力してみましようという首長の方が結構いらっしゃいました。

木のおもちゃで人生を始めることを「ウッドスタート」、木の棺桶で人生を終えることを「ウッドエンド」とし、これを生涯木育と定義してこの考えを全国各地に広めました。



